
サンタ × サンタ

槇野雅文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタ×サンタ

[T-2]

N 3522 J

【作者名】

横野雅文

【あらすじ】
12月24日。それは何か期待してしまつよつた、そんなある日のこと。

桜坂高校1年の水本拓と、同じく1年で幼馴染の桜真央はある人物と会うことになる。そこで、サンタの真実を知ることとなる。

ついにその答えが今明らかに！！

い
る
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

プロローグ

（プロローグ）

12月24日。

それは何か期待してしまつよつた、そんなんある田のこと。

外はLED発光で赤や黄、青、緑と普段感じることのない、温かみがある。

そして、大きなツリーの下には決まってきれいな星がついている。

少し薄暗い中でも全く寂しさを感じないどころか、むしろ人々の心を引き付けるものがある。

「サンタさん。今日来てくれるかな。」

「タクがいい子にしてたら、来てくれるわよ。」

「やつたー。」

とふと昔のことと思い出していた俺、水本拓は高校生になった今でも、あのビックが怪しげなサンタを信じている。

といふのも自分がサンタであるからだ。

ついこの前の自分ならサンタなんて、宇宙人とか未来人とか超能力者でも会わない限りこれっぽちも信じていなかつただろう。

つまり、昨日ある事件が起つたのだ。

第1章 サンタ×サンタ

第1章 サンタ×サンタ

12月23日。

それは若い人の中では、イブイブとかいうのであらうが、

彼女のいない自分にとつてクリスマスなんて、どうでもいいイベントの一つだった。

高校生にでもなれば、かわいい彼女が1人くらいいてもいいのだが、全くといっていいほど縁なんてものはない。

しかも、携帯の電話帳なんざ女の子は2人入っているだけだ。

女の子の1人は俺のばあちゃんで、3ヶ月前突然シニア携帯が欲しいなんていうから、俺のうちは複雑な理由あって両親は不在だか

ら、俺が着いていつてやるしかなく3時間の格闘後、ばあちゃんはようやく携帯を手に入れた。

そこで仕方なく、赤外線といつなんともありがたい機能を使って電話番号を交換したわけだ。

ばあちゃんは最後まで見ているだけだったのだが……。

そしてもう1人は、口うるさい幼馴染とか言う奴だ。

名前は桜 さくら 真央 まお

かわいらしい名前はしているが、性格は真反対で運悪く同じクラスだ。しかも家は隣り同士でこれがまた結構面倒だ。

小さい頃から、野球好きで何度も鼻にボールを当たられたことか。とにかく本当に元気な奴なのだ。

早速、携帯のバイブが鳴るもんだから俺は慌てて携帯を開いた。予想通り真央からだつだ。

『明日暇。翔も来るからどうせあんた、彼女もいないんだから暇よね。6時までには来なきよー』といひのことは全くお構いなしに書いてあつた。

つまり、暇でも、暇じゃなくても来いといふことなのだらへ。

行つてやるぞ……。

しかも俺が通う花坂高校のみが、昨日から休みだ。とはいっても、宿題に手をつける元気もなく、いつも夕暮れの肌寒い路地をチャリで飛ばしているのだ。

もつとも、ばあちゃんと2人暮らししな訳で、家から1キロ程の少しあびれたスーパーに買い物をするために向かつているのだ。

これから待ち受けていること全く気づかず。。

店に着くと、いつも通りおばさん連中が夫の愚痴を漏らしながら、店を出て行った。

俺は店に入る前に、チャリキーをかけるのを忘れていたのに気づきチャリ置き場まで折り返した。

そこで俺は人生初となる目撃をしてしまった！

俺のチャリを盗んで店の裏に隠れるいかにも中年らしき男を見つけてしまったのだ。とにかく道を蹴った。走って店の裏に行つてみると……。

驚いた、チャリを盗んだのはサンタだったのだ。

確かに俺のチャリは比較的きれいな方だったのかもしれないが、サンタが白い大きな袋の中にチャリごと入れているもんだから、俺は何もできずにただ睡然とその光景を見ているだけだった。

ようやくサンタは、俺の存在に気づき急にチャリを抱えて逃げ出そうとするもんだから、慌てて捕まえた。

「おい、お前サンタの格好なんかして、俺のチャリ盗んでんだよ。」と早口で俺が言つと、

「それはですね。あなたの自転車が必要だったからでして、たくさんの。」とサンタの格好をしたおっさんが言いかけたとたんに、俺は叫んでいた。

「なんで、サンタの格好してんだよ。」

「つまり私はサンタなのです!」

俺はひっくり返りそうになった。それもまた、真面目な顔で言つもんだから、思わず吹いてしまつた。

おそらくよっぽどバカでない限り、こういう状況で、サンタの服を着て私がサンタです。

なんていう奴はなかなかいないだろう。少なくとも、俺が会った中ではこういうたぐいの奴はいなかつたはずだ。

真央よりもバカなのかもしれない。

そして、サンタは続けた。

「あなたみたいな一般人にはちょいと話が難かしすぎるかも分かりませんが、サンタが生きる世界には大きく分けて3種類のサンタが存在するのです。

まず1種類目はサンタは、アクアマリン。2種類目はファイアーアー

ソウル。そして3種類由はレインボーサタンと呼ばれ、種族「」と
特徴があるんですよ。

もつとも例外的に、あなたの「両親なんかもサンタに呑まれたり
もしますが……。

簡単に言えばサンタの世界も食つか食われるかといつてなんで
すよ。

私が所属するアクアマリンといつのは、とにかく貧乏でしていつ
やつて盗まなくてはならないことも、度々あるのです。」

「つまり、あなたはそのアクアマリンとかいつといつに所属して
いて、子供達にプレゼントを配るために、いつして俺のチャリを盗
んだってわけですかあ。

「つて全然意味わかんねーよ。なんで中年のへせじてサンタやつて
るんだ?」と俺が尋ねると、

「サンタなんている訳ないって思つていませんか？実は私もそうでした。

でもいて欲しいーと思つたんですね。当然、サンタは親だと薄々気づいていました。

いつだつたでしょうか。

多分小学3年生の頃だつたと思ひます。

友達に親がサンタだつて言われたもんですから、最初は驚きましたけど、よく考えてみればサンタなんていないだろうつて決め付けていたんですけど、本当にサンタは親なのか確かめたくなりまして……。

私が小3のクリスマスの日、寝るふつをしてずっと起きていたんです。

そして夜の3時、もうだつたでしょうか、鍵が掛かっている窓から通り抜けて、サンタが現れたのですよ。

びっくりして、息もできず、それでも寝のふりをしてこました。

そして、サンタはプレゼントの包みをひとつ枕元に置くと、急ぐ手こしてまた窓を通り抜けて行ってしまったんですよ。

私はあわてて窓を開けて見ましたがもうサンタの姿はありませんでした。

そして、明かりもつけず、プレゼントの小包を開けてみると、ずっと私が欲しかった『ベイビーマ』があつたんですね。

当時貧乏な私にとって、『ベイビーマ』一つも買って貰えませんでしたから、それはそれほうれしくてじょうがなかつたんですよ。

朝になつて机の上にもう一つプレゼントの包みがあるもんですから、めちゃくちゃうれしかつたんですよ。

そして学校で友達に言つてやつたんです。サンタは本当にいるぢつて。友達みんなからバカにされましたね。

あの時は本当に悔しかつた。だつて本物のサンタを見たんですか
……。

ところがですね、翌年サンタは来なかつたんです。正確に言へば、母ちゃんしか部屋に入つてこなかつたんですよ。

つまりあれですね、貧乏な家の子しかサンタは来ないんですよ。私の家も親父がそこそこ農業で食えるようになり、普通の子並みにお小遣いも貰つてたんですよ。」と長々と話した。

俺はそれを聞いて、サンタがもしかするといふんじやないかと思つた。しかも、実際目の前にサンタがいるからだ。

じゃあなんで、ねつさんはサンタになれたんだろうつか？

サンタ、サンタといつているがサンタつていつたい何者なんだろ
うか？

心の中で葛藤を続けていた。

そして思わず口にしていた。「サンタになる」「ほら、やればいい
いんだ！」

サンタは「このときを待つっていたかのよつた、そんな鋭い目つきを
して、俺にそつと話しかけてきた。

第2章 サンタの正体

第2章 サンタの正体

「あなたはサンタになりたいんですか？いや、やめといた方がいいですよ。いろんな意味で……。」
とサンタは、苦笑いをして言った。

「いろんな意味で、こののは気になるところだが、サンタになりたいのか？」と聞かれて別になりたくないです、なんていつたら別に興味ないですから。と言っているようなものであろう。俺自身、少し気にもなっていたのだから……。

そして、俺は言った。

「あいつてはクリスマスだろ！俺もおっさんの手伝いやつてやるよ。」と胸を張つていると、サンタの顔は突然引きつった。そして、サンタはキレた。

「サンタをなめるなよーお前さんは、万引きや泥棒、時には強盗

だつてしなきやならんかもしれんのだ。」少し咳き込み、サンタは続けた。

「少し言い過ぎたかもしかんな。それぐらい今サンタの世界は厳しいんですよ。それだけは分かってくれ。実際私も、おまえさんのようなものを盗んだのはこれが2回目なんです。

もうサンタになつて20年目なのですが、今年は大不況でして……。サンタにはノルマというものがあります。ノルマは、子供達のところにプレゼントを届けたら、届けた分チップとなるんです。

つまり給料みたいなもんです。チップは子供1人に付き1グランです。ちなみにグランは宇宙共通なのです。」

「ちょっと待て！ とこり」とはだ、サンタは宇宙規模で活動しているのか？」と俺は言った。

「そういうことになりますね。地球以外にも、アンドロメタやオリオン聖、火星なんかにも行きますかね。それぞれの星によつてクリスマスの時期は異なります。

わづかの話の続きで、ちなみにもう1グラムはドルにして1ドル、日本円にして100円といったところでしょうか。もう一度聞きますが、

『あなたは、サンタになりたいんですか。』

そして、俺は即答した。

「ああ、その得体の知れねえ、サンタとやらになつてしまふよー。わざと早くチャリを返せ。」

「ダメですよ。これはある子供のプレゼントなんですから。」

「何でだよー! って乗つて逃げるな

「元々鍵を掛けないのが、悪いんですよ。」

そして、これから始まろうとしていることにまだ気づきもしない水本拓であった……。

第3章 サンタの本当の正体へ前編へ

第3章 サンタの本当の正体へ前編へ

よく晴れた天気の、ある12月24日のこと。

きらきらと眩しい太陽と小鳥のさえずりで目覚めた俺は、目覚まし時計がぴったり12に短針と長針がぴったり合わさせていたことに気が付いた。

それは、12時を示しているのであり、遅刻といつ2文字も示しているのだった。

昨日のサンタとぴったり12時にスーパーの裏の場所、つまりサンタがいることを思い知られたところで、待ち合わせをしてるのだ。

俺は服を着替えて、前髪を水で濡らしながら歯を磨き、ドライヤーで乾かすと、食パンをくわえて、ようやくチャリに乗ることがで

きた。そして、全速力で飛ばした。

まあ、そんなに焦ることも無かつたんだが……。

店のチャリ置き場に、何とか返して貰つたチャリを止めて、次は絶対に取られないようにしっかりと鍵を閉めた。

腕時計をみると15分。overといったところだろうか。我ながら、朝起きてから15分で到着できたことに感謝したい。チャリキーを振り回して、店の裏に行くと……。

俺はまたもやその光景に唖然としてしまった。

それはサンタが白い大きな袋の中にチャリ」と入れている時とまるで比にならないぐらいのことが起きていた。

そこには、サンタの格好した奴と女子高生がいたのだ。

それも隣の家で、幼馴染の真央だった。

まったくこの原理といつものが、いまだに分からないが、何を思つて真央までいるのだろう。こんなひつそりとしたところに、サンタの格好した奴と女子高校生が2人だけぽつんといえば誰だつて驚くだろう。そうじやなくて何で真央がいるんだ。

といふことは、真央もサンタの手伝いとでも言つつもりなんだろうか。その時、真央は俺に気がついたのか眼を点にして言つた。

「頼もしい助つ人つてあんただつたの！」その声はどことなく響き渡つた。

でも驚いたもんだ。真央が堂々とサンタと話していたのだから。

てつくり、サンタの正体を知つてしまつたのは自分だけだと思い込んでいた……。

そして、真央の近くまで寄ると俺は口を開いた。

「おまえもサンタの助つ人か？」

真央は不安そうな顔でつぶやいた。

「そりよ……。」

そこでようやくサンタは俺と真央が知り合いであることを理解したのか、相づちまで打った。

「友達ですか？」

「そりよとこかしら……。」

サンタは、はつとした顔をしてもう一度相づちを打つた。

「そういえば、お一人さんの自己紹介を。」

真央はサンタの方に向いた。

「私の名前は桜真央。まあ、真央でいいわ。で、ちなみにこの目の前にいるスケベで頼もしい助つ人さんが、私の幼馴染の水本拓よ。」

何か得意げな表情で真央は胸を張っていた。こういつ時の彼女の目はどこか輝いていた。

本当にしみじみと感心してしまう。

「のでしゃばりなどこに……。」

空は雲ひとつなく、青空が空一面に広がっている。

しかし、外の空氣は身にしみるような寒さだ。

真央は、パーカーの上にダウンジャケットを着て、それでも寒そうに手を震わせながらサンタの話に耳を傾けていた。

サンタは今日の一連の仕事を話終えると、つかつかとチャリ置き場の方向に行ってしまった。そして、真央は俺の顔を覗きこんだ。

「拓。あんたはいつから、サンタの助つ人始めたのよ？」

「昨日だよ。」

真央は急に立ち上がり、腕組みをした。

「そ、なんだ。じゃあ私の後輩ってことね。」

「言つてゐる意味がわからないんだが……。」

得意氣な顔で、真央は口走つた。

「簡単に言えば、あたしの方が先に助つ人になつたつてことでしょ。」

「お前はいつからだよ?...」

「2日前……」

「…………、つてはあーたつた1日だけで偉そうに言つたな。」

「まあ、後々身に染みるよつに分かるわよ。」と真央が言い終え
ると同時に、サンタがココアを3本抱えて一本ずつ俺たちに渡した。

「じゃあ、よろしく頼むな。」

そう言い終えると、サンタはココアを一気に飲み干して、白い吐息
を吐いて俺達にカイロを渡した。

半信半疑で見てみると、ボタンが3つ付いていた。そして、上から
1、2、3とある。

「「」のカイロは何なんだ。」

と俺が尋ねると、サンタは言った。

「「」のカイロは、3つ性能があります。上から1、2、3とボタン
があるのが分かると思いますが、1を押すと私達と無線で会話がで
きます。2を押すと透明になり、浮く」」とができます。

「は本当に何かあった時だけ押してください。3を押せるのは力
イローツにつき一回だけです……。」

「なんだ、3は一回しか押せないのよ。」

サンタは、深刻な顔つきと鋭い目そのまま黙り込んでしまった。

しばらくして重い口を開いた。

「とにかく、本当に何があった時だけにしてください……。それ
では、サンタの世界に行きましょうか。」

そう言い残すと店の裏へと歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3522j/>

サンタ×サンタ

2010年10月10日06時49分発行